

流通の課題

9

広島県の「備後表」は、自他共に認める高級畳表の代名詞だ。備後のイ草で織った上物だと、表替えて1畳10万円を超える価格で販売する店もある。

ところが、産地の広島県でイ草を栽培している農家はわずか9戸。作付面積は約3割にすぎない。備後表として流通する畳表の大半が、実は八代産のイ草で織られたものだ。

「昨年度出荷した備後表は約33万枚。そのうち備後のイ草で織ったのは約1万3千枚で、残りはほとんど熊本産」。広島県蘭製品商業協同組合(福山市)の事務局長、寺本安雄さん(59)が明かす。

広島には織り専門の農家が60戸ほどあり、間屋が仕入れたイ草を伝統技術で畳表に織る。八代で畳表を仕入れる場合は、経

岐路に立つイ草

第2部

米に黄色や青色などが交じった「備後表」であることを示すブランドで販売するという。島県い業会館指定の証書を織り込んでほしい。2008年から畳表を1枚ずつに裁断して検品はい業会館が導入した備後表の

検査印で「原草熊本・織地熊本・加工広島」などと、畳表の属性を明示している。

「広島には伝統に培われた目と技術がある。八代のイ草や畳表から備後表の名にこだわりの上質なものを選び、製織、加工して全国に送り出している」と寺本さん。「われわれの目にはな

ったものが備後表だ」と言わんばかりの自負がのぞく。

備後表の歴史は南北朝時代にまでさかのぼる。北朝方の公家が残した「師守記」の1347年の項に「備後産」の記載がある。江戸時代には福山藩主が特産品として保護奨励し、宮中や幕府の御用表に指定された。戦後は岡山や熊本の台頭もあり、イ草の生産が急減。寺本さんの組合に加盟する間屋も1980年代初めの約160社から

現在、28社にまで減った。

八代市に支店を持つ斎藤商店(福山市)は、主に八代のイ草を広島県の農家などに織ってもらい、全国販売している。斎藤誠社長(49)は「昔は『熊本表は安物』のイメージがあったが、生産者が勉強を重ね今は色むらや傷の少ない畳表を作る」と評価した上で、「それでも高齢者や畳にこだわっている人は『備後』を指名する。それに応えなくてはならない」と話す。

「熊本産の生産者が自前ブランドにこだわる気持ちは分かるが、備後の名をもっと利用した方が良いのではないかと斎藤社長。これに対し、産地の八代からは「八代のイ草を八代で織った畳表が最後に裁断されただけで『備後』として流通するのは納得できない」と憤る声も聞かれる。

消費者の立場からしても「備後産の備後表」や「八代産の備後表」がある現状は、やはり分かりにくい。(長野希実)

ブランド



八代産をはじめ備後産、中国産の畳表が並ぶ間屋の倉庫
＝広島県福山市

広島「備後表」

大半が八代産